台大日本語文研究第 39 期
2020 年 06 月，頁 1-26
2020-03-24 收稿，2020-06-01 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.202006_(39).0001

《宇津保物語》中的理想男性形像
—八面玲瓏的仲忠人物造型—

賴振南*

摘要

《宇津保物語》的故事情節，與《竹取物語》中的輝夜姬(かぐや姫)和《伊勢物語》中的「從前某男子」一代記式故事內容大異其趣，物語格局已從「吾」與「汝」此種個人單位的交涉圖，擴大成「吾家族」和「他家族」這種家族規模的交叉圖。在此長篇物語的大型框架內，讓眾多登場人物出場，再透過跨四個世代的秘琴一族的故事情節展開出的協同演出效果，清楚看得出物語的縱向關聯和橫向關聯已交織成對比複線結構。特別是針對物語中的四十八位男性主要角色，不僅都賦於他們不同的故事內容，同時也創造出形形色色的人物造型，在這物語的情節演變中。而格外受到注目的一點是，從存在於秘琴傳承者藤原仲忠的理想男性形象塑造過程中，應該可探索出物語整體的主要意義和統一性。

此外，在物語中首尾一貫的秘琴一族故事發展過程中，令人不容忽視的是，俊蔭女兒和仲忠這對母子之間，有生活中歷歷可見的慈愛、孝養等儒教「孝」的精神發揮作用著。簡而言之，《宇津保物語》的表層有一股相關「琴(Koto)」的藝術性，而深層內有一股以「孝」的倫理性為主題的故事流動著，除此之外，更不可忘卻的是，俊蔭女兒和仲忠這對母子的理想人物造型，一直從背後支撐著物語。

更進一步來說，仲忠與「好色風流(Irogonomi)」的父親藤原兼雅不同，他是精於音樂又才華橫溢的「風雅之士(Sukimono)」，因仲忠具

* 天主教輔仁大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

備能將「風雅之士」與學問融和一起的特質，更有無微不至的行動表現能力，才足以抗衡以「貴宮 Atemiya」為重心的權貴世家源正賴家族，將藤原兼雅一族經營運作成理想的家族。為此，有必要提出仲忠的人物造型加以探討，針對他的八面玲瓏男性理想形象進行分析。關於《宇津保物語》中的理想女性形象，將另稿論述之。

關鍵詞：《宇津保物語》、男性形象、八面玲瓏、藤原仲忠、人物造型

臺灣大學學術期刊資料庫

The Ideal Male Figure in Utsubo Monogatari : A People Pleaser of Nakatada's Character

Chen-nan Lai *

Abstract

The storyline of *Utsubo Monogatari* (*Tale of the Hollow Tree*) is very different from other stories that portray only one generation of characters, as in Kaguya Hime in *Taketori Monogatari* (*The Tale of the Bamboo Cutter*) and "a man once upon a time" in *Ise Monogatari* (*The Tale of Ise*). In *Utsubo*, the story line has expanded from interactions between individuals, the "I" and the "you," into one that involves interactions between families. In this full-length narrative, there are multiple characters spanning four generations, with their lives revolving around the magical harps (*koto*). The characters are so vastly intertwined in a series of occurrences that builds an intricate and complex plotline. This is true in particular with respect to the 48 main male characters; each not only has his own narrative, each is also portrayed differently and evolves as the story progresses. Also noteworthy is the shaping of the ideal male image as evidenced in the musical prodigy Fujiwara no Nakatada. By tracing the development of the male image, one will be able to explore the significance and unifying theme of the story.

In addition, as the plot develops around the magical harps, which is the unifying strand running through the story, the mother-son relationship between the daughter of Kiyowara no Toshikage and her son Nakatada also deserves attention, as it is characterized by motherly love and filial piety. On the surface, the principal theme of the *Utsubo* appears to be the

臺灣大學學術期刊資料庫

* Professor, Department of Japanese at Fu Jen Catholic University, Taiwan.

importance of art in the form of the magical harps, yet narratives centered on the theme of filial piety flows underneath. Furthermore, the ideal images of the mother and of Nakatada the son likewise lend support to the progression of the plot.

To be sure, Nakatada is vastly different from his father Fujiwara no Kanemasa. While the father is promiscuous and a connoisseurs of love (*irogonomi*), Nakatada on the other hand is a gifted musician, charming and elegant (*sukimono*), and a meticulous man of action. Because of this, Nakatada is able to stand up against Atemiya, daughter of lord Minamoto no Masayori, and at the same time bring honor and prestige to the Fujiwara no Kanemasa family. For this reason, it is necessary to explore the image and makeup of Nakatada the character, as well as analyze his well-rounded and ideal male image as a people-pleaser. The female images in the *Utsubo* will be explored in another paper.

Key words: *Utsubo Monogatari* (*Tale of the Hollow Tree*), Male Figure, A People Pleaser, Fujiwara no Nakatada, Images

臺灣大學學術期刊資料庫

『うつほ物語』における理想的な男性像
—八面玲瓏な仲忠の人物造型—

頼振南*

要旨

『うつほ物語』は、『竹取物語』のかぐや姫や『伊勢物語』の「昔、男」のような一代記的物語とは異なり、「我」と「汝」という個人単位の交渉図を、「我が族」と「ある族」という家族単位の交差図に拡大したものなのである。この長編物語の大きな枠組みの中に多くの登場人物を登場させ、四代にわたる秘琴一族の物語を展開するという相乗的な演出効果によって、物語の縦の繋がりと横の繋がりという対比複線構造がはっきりしている。特に男性主要登場人物の四十八人について、様々な人物造型と物語が創り上げられる流れの中で、特に注目されるのは、秘琴伝承者の藤原仲忠が理想的な男性像として物語の主要意義と統一性を求められる存在である点である。

また、この首尾一貫した秘琴一族の物語において俊蔭娘と仲忠の親子間に儒教的な慈愛・孝養などの現実的な「孝」の精神が働いていることも見逃すわけにはいかない。要するに、『うつほ物語』の表層には琴の芸術性をめぐる物語があり、深層に「孝」の倫理性をテーマとする物語があるほか、俊蔭娘と仲忠という理想的な人物造型が物語を裏から支えていることも忘れてはならない。

更に、父兼雅の「色好み」と違った、音楽に堪能で、才能のある「好き者」と学問の調和を全うする仲忠の特質と行き届いた働きによって、「あて宮」を中心とする権門源正頼家に対抗できる藤原兼雅一族を理想的に運営することができるのである。したがって、仲忠の人物造型を取り上げてその八面玲瓏な男性理想像の特質を解析す

* 輔仁大学日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

べきであろう。『うつほ物語』における理想的な女性像については、稿を改めて論じることにしたい。

キーワード:『うつほ物語』、男性像、八面玲瓏、仲忠、人物造型

臺灣大學學術期刊資料庫

『うつほ物語』における理想的な男性像
—八面玲瓏な仲忠の人物造型—

頼振南

一、はじめに

二〇一三年に出版された『うつほ物語大事典』[1]は『うつほ物語』[2]の研究上、画期的な参考資料であった。この作品で一番厄介で複雑な登場人物の部分を「主要登場人物編」と「脇役・端役編」に分け、更にそれぞれの登場巻と人物の物語を紹介し、主な研究史を提示した点は研究上大きな助けとなる。主要登場人物編に計五十六項目の七十九人[3]、脇役・端役編に計約二百七十七人を掲載し、物語のすべての作中人物が網羅されている。『宇津保物語・俊蔭 全訳注 』の裏表紙においても、

> 『源氏物語』をやがて生む素材に満ちた『宇津保物語』は、日本最古の長篇物語として物語文学に大きな影響を与えた。(中略)俊蔭－俊蔭の娘－仲忠－犬宮と一家四代にわたって継承される琴の伝承譚と、時の権門源正頼の娘あて宮をめぐる十六人の求婚譚の二本立ての物語が展開する。貴族から庶民に至る人間模様を生き生きと綴る好編。[4]

---

1 学習院大学平安文学研究会(2013)『うつほ物語大事典』勉誠出版

2 テキスト：中野幸一　校注・訳『うつほ物語①』(1999)、『うつほ物語②』(2001)、『うつほ物語③』(2002)、新編日本古典文学全集 14～16、小学館
以下の引用は、「巻名」ページ数（例：「俊蔭」p.31）で表記する。用例検索は. データベース「新編 日本古典文学全集」
（知識探索サイト　ジャパンナレッジ　プラス　JapanKnowledge+）
http://www.jkn21.com/koten/displaymain　に拠る

3 五十六項目の中に清原俊蔭の父母（二人）、三奇人(三人)、袖君・真砂子君（二人）、源正頼の子女（二十人）の人数を合わせて七十九人となる。(『うつほ物語大事典』p.vi)

4 上坂信男、神作光一　訳注(1998)『宇津保物語・俊蔭 全訳注』講談社、講談社学術文庫、裏表紙

臺灣人文學術期刊資料庫

と、述べられたように、『うつほ物語』は、「貴族から庶民に至る人間模様を生き生きと綴る」佳作である。『うつほ物語』は、『竹取物語』のかぐや姫や『伊勢物語』の「昔、男」のような一代記的物語とは異なり、「我」と「汝」という個人単位の交渉図を、「我が族」と「ある族」という家族単位の交差図に拡大したものなのである。この長編物語の大きな枠組みの中に七十九人の多くの主要登場人物を登場させ、物語の縦の繋がりと横の繋がり[5]という対比複線構造を組み入れて興味深いテーマやモチーフなどを引き出している。これは実に一大工程と言うべきであり、七十九人の主要登場人物を男女別に分ければ、男性計四十八人、女性計三十一人になり、それぞれにある程度のストーリーを付与することによって、日本文学史上初の長編物語として成立しているのである。特に男性主要登場人物の四十八人に関して色々な人物造型と物語が創り上げられる流れの中で、特に注目されるのは、秘琴伝承者の藤原仲忠は理想的な男性像として物語の主な意義と統一性を求められている点である。更にまた、この首尾一貫した秘琴一族の物語において俊蔭娘と仲忠の親子間に儒教的な慈愛・孝養などの現実的な「孝」の精神が働いていることも見逃すわけにはいかない。要するに、『うつほ物語』の表層には琴の芸術性をめぐる物語があり、深層に「孝」の倫理性をテーマとする物語があるほか、俊蔭娘と仲忠との理想的な人物造型が物語を裏から支えている点にも注目すべきである。もしこの長編物語に華々しく活躍した人、敬慕される男性人物であるヒーローが首尾一貫した多くの巻から看取できるとしたら、それは物語作者が苦慮を重ねて描き上げた仲忠という理想的な男性像の帰結でなければならないのである。仲忠は物語の中で四代にわたる秘琴一族の伝承者、父藤原兼雅一族の維持者、あて宮求婚譚の求婚者、祖父清原俊蔭伝来の書籍の学問者などとして造型され、その活躍ぶりが物語中のほとんどの主要登場人物と縦横の繋がりを形成し、立体化する役割を

5 猪川優子（1997）「『うつほ物語』の〈秘琴〉と〈あて宮〉―「繋がり」の形成をめぐって―」『古代中世国文学』9号、広島平安文学研究会、p.1-8

臺灣人文學術期刊資料庫

果たしている。このような八面玲瓏な男性理想像としての特質を以下のようにまとめ、更にその内実を解析していきたい。

1.「光」る容貌を持つ主人公である
2.親孝行の子である
3.求婚敗北者であるが、あて宮の最愛の相手である
4.「色好み」の好色漢ではなく、「好き者」の行動者と実践者である
5.父藤原兼雅一族の大家族を維持、強固する人物である
6.祖父清原俊蔭伝来の書籍の学問者である
7.友情共同体を織り成す知音者である
8.俊蔭一族の天上の秘琴系譜の伝承者である

二、「『光』る主人公」、「親孝行の子」、「あて宮の最愛の相手」

『うつほ物語』における男性主要登場人物は大勢いるし、各々彼らにまつわる物語や特質をいちいち取り上げれば枚挙に暇がないので、あて宮をめぐる求婚譚に登場する求婚者だけに焦点を当てて、その人物造型を検討してみよう。その十数名の求婚者は、『竹取物語』の五人の求婚者と同じく、春宮をはじめ多くの身分の高い親王や上達部が学問や才能などを持っている者である。また『竹取物語』の求婚者のように各々の才能、特色や人物造型などの始末も語られている。中には求婚者の上野の宮と三春高基と滋野眞菅との三奇人を物語展開と関係付けて物語を長編化させる滑稽譚もあるが、これは「単なる滑稽譚としてではなく、『うつほ物語』に描かれた祝祭の表現の一つとして読む必要があろう」[6]と室城秀之氏が指摘している。さらに、妹へのタブー破りの恋の情念を燃え尽くして死んだ源仲純の悲劇にしても、兵部卿の宮（あて宮の叔父）と三の親王（あて宮の甥）の近親者としての求婚行動にしても、「一家離散の哀感と邂逅の感動に満ちた」[7]実忠物語にしても、学者の成功譚として読まれ

[6] 室城秀之（1996）「上野の宮論――『うつほ物語』における祝祭の論理」『うつほ物語の表現と論理』若草書房、p.123
[7] 竹原崇雄（1990）「『宇津保物語』「菊の宴」における実忠物語の成立」『宇津保物語の成立と構造』風間書房、p.73

臺灣大學期刊資料庫

る藤原季英の物語にしても、あるいは、「〈拒否される求婚者たち〉としての存在」[8]と指摘された行政・仲頼・忠こそ・季英の四人も含め、多くの求婚者たちは、ある意味では、この物語にとってそれぞれ特徴的な登場人物として、日本初の長編物語を裏側から支えているのである。そして、それだけではなく、その才能、特色や学問を持っている求婚者たちの強みと弱みを仲忠の人物造型と照らし合わせてみれば、作者は仲忠に焦点を当てて物語における理想的な男性像を浮き彫りにしようとしていると考えられるのである。

仲忠は俊蔭の孫であり、俊蔭が波斯国へ漂流している間に天女から与えられた、「この山の族七人にあたる人を、三代の孫に得べし」（「俊蔭」p.37）という予言の子である。さらに俊蔭の娘は、若子君（後の藤原兼雅）と琴を媒介にして一夜の契りを交わし、仲忠を身ごもり、出産する。その後は親子が不遇の生活を送るが、仲忠は孝の精神で、母の食料を調達するなどして日々を送る中、「容貌は、日々に光るやうになりゆく。見る人、抱きうつくしみて」（「俊蔭」p.72）人に好かれている。仲忠は生い立ちが伝奇的で中国の孝行説話の影響もあり、容貌は「光る」ばかりではなく、神仏が仮に人の姿となった「変化の者」（「俊蔭」p.74）でもある。

あて宮求婚物語における仲忠は求婚者群の卑小な一個人でしかないにもかかわらず、物語の展開上においては、琴の秘技を「吹上　下」巻で再現したり、ほかの求婚者と違って、あて宮から「人々の中に、こともなしと思す人」（「春日詣」p.281）と愛顧を受けたりすることによって、秘琴物語の主題性を継続させる担い手として存在する。つまり、「あて宮」巻までの物語のプロット展開は一見求婚物語が中心であるようでありながら、実は秘琴一族の物語も仲忠の行動によって脈動しているのである。

また、あて宮からの対応としては、春宮に次いで返歌が多い人物となる。あて宮自身も、

[8] 室城秀之（1996）「拒否される求婚者たち――行正・仲頼・忠こそ・藤英をめぐって――」『うつほ物語の表現と論理』若草書房、p.71

臺灣大學圖書館期刊資料庫

おぼろけの折にものの音出ださず。されどたまさかに、琴仕まつり遊びなどす。九の君と聞こゆれど、仲忠には御目とどめたまふ。(中略)さればいと心憎くて、をかしき者になむ思しける。(「嵯峨の院」p.321-322)

と、仲忠に目を留めて、まことに奥ゆかしくてすばらしい方だと評価し、仲忠に心を引かれている。

「祭の使」巻における仲忠とあて宮の次のような接近は、琴の音色の媒介によるものである。

月のおもしろき夜、今宮、あて宮、簾のもとに出でたまひて、琵琶、箏の琴、おもしろき手を遊ばし、月見たまひなどするを、仲忠の侍従、隠れ立ちて聞くに、調べよりはじめ、違ふ所なく、わが弾く手と等しくと聞くに、静心なし。身はいたづらになるとも、取りや隠してましなど思ふにも、母北の方の御ことを思ふに、なほいとほしく思ほゆ。思ひわづらひて、隠れたる簀子に立ち入りて、(「祭の使」p.502)

仲忠はあて宮の琴の音色に誘われ、以前から募っていた恋情を更に掻き立てられて、生涯を賭けてもあて宮を奪って隠そうと思うと同時に、母が心配するだろうと考え直し、躊躇しつつ、孫王の君を通して、面会してほしいという歌を贈ることで自らに歯止めを掛けた。

琴という媒介的小道具による上述の緊張場面は、仲忠にとって身が破滅するほどの危機でもあり、不孝の子となるかもしれない境目でもある。多くの求婚者は求婚譚という試練に晒されたあげく、あて宮の入内によって皆失恋し、死者が出るほど落ちぶれてしまう。例えば、実忠は小野に籠もって嘆き続け、仲頼はよそ見もせず愛した妻を離れ、出家して水尾に籠もる。あて宮の兄仲純は恋の病が深

臺灣大學學術期刊資料庫

刻になったあげく死んでしまう。また、滋野真菅と三春高基の二人は憤慨した結果、それぞれ流罪にされ、家を焼いて山に籠もる狂態を演じる。その中で、仲忠は親、特に母への「孝」を強く意識しているので、あて宮求婚をめぐる危機を乗り越え、あて宮入内後の失恋の落胆を乗り越えることができたのである。

一方、あて宮の入内後、水尾の山に籠もって隠遁生活を送っている仲頼を訪れた仲忠は、ようやく自分の失恋の悲しい心情を次のように吐露する。

> 藤中将（仲忠）「あが仏、などかかく思はぬさまにてはものしたまふ。仲忠ら、片時世に経べき心地もせねども、親に仕うまつらむと思ふ心深ければ、しばし交じらひはべれど、かくておはするを見たてまつりはべれば、まづ悲しくなむ」とて、
>
> うち見れば涙の川 と流れつつわれも淵瀬を知らぬ身なれば（「あて宮」p.137-138）

要するに、仲忠の失恋の悲しさも決して並大抵のものではなかったにもかかわらず、仲頼のように行動に任せることを抑え得たのは親に対する「孝」の精神が強く働いていたからである。特に、仲忠は幼児から中国の二十四孝に準えられ、「母を養うべく、凍てついた河で、魚を釣り、また、雪山に芋や木の実を採りに出かける仲忠の姿は、読者の胸を打つ」[9]孝子であるし、母の一人子なので、母を孝養する意識が常に行動の指標として「その孝心が、仲忠に現実感覚を与え、危機を回避させている場合」[10]も少なくないのである。

以上をまとめると、仲忠は求婚過程において、琴の秘技によって宮廷社会に認められ、あて宮の好意を得たが、王権の若い代表者の春宮という競争相手の強要の反動として、熾烈な恋情を非常の行動に任せようと思う反面、倫理的な「孝」の精神が作動して、あて宮

[9] 大井田晴彦（2002）「孝・不孝」『うつほ物語の世界』風間書房、p.339
[10] 注 9 に同じ。p.340

臺灣大學學術期刊資料庫

を奪わず、結果として身を滅ぼす危機を逃れたのだと言える。そして、あて宮の入内による失恋の悲嘆も「孝」の精神の故にこそ、客観化して、後の家族構築に転化し得たのである。換言すれば、倫理的な「孝」の精神は、「愛」との葛藤という内的試練においても、秘琴一族の底流をなしていると看取できる。

三、「『好き者』の行動者と実践者」、「大家族を維持、強固する人物」

『うつほ保物語』における「色好み」の用例を、人物別に数えてみれば、兼雅三例、平中納言（正明）二例、忠こそ一例、仲頼一例、梅壷一例、仲純の弟（近純）一例の九例を挙げることができる。女性の梅壷と仲純の弟を除けば、いずれもあて宮をめぐる求婚者である。兼雅は、「限りなき色好みにて、広き家に多き屋ども建てて、よき人々の娘、方々に住ませて、住みたま」（「藤原の君」p.138）う人であり、平中納言正明は、「いとかしこき遊び人、色好みにて、ありとしある女をば、皇女たちをも、御息所をも、のたまひ触れぬなく、名高き色好み」（「藤原の君」p.140）である。この二例は、いずれも多くの女性と交渉を持った「博愛家」を意味する。ただ、平中納言正明の「色好み」の場合、女色の追求は、その一面で、「いとかしこき遊び人、色好み」とも言われる。この「あそび」[11]に長ずる「色好み」は、忠こその、「遊びいとかしこく、こともなき色好み」（「忠こそ」p.217）、及び仲頼の、「穴あるものは吹き、緒あるものは弾き、よろづの舞数を尽くして、すべて千種のわざ世の常に似ず、かたちもいとこともなし。世の中の色好み」（「嵯峨の院」p.354）と同じように歌舞管弦や芸能に豊かな才能を示すという属性を所有

[11] 桜井満、宮腰賢　編『全訳古語辞典』（1993 年重版発行）旺文社、p.34 中・下【遊び】①神事としての芸能・狩り。行楽。遊宴。②管弦のあそび。また、詩歌・舞などで楽しむこと。遊興。③「遊び女」の略。
〔学習〕「あそび」
心楽しく時を過ごすことをいうのが「あそび」の原義である。何によって心楽しく時を過ごすかは時代によって異なる。上代では①の狩りや行楽、中古では②の管弦の演奏が主要なものであった。特に中古では管弦の遊びをさすことが多い。

臺灣大學學術期刊論文資料庫

している「色好み」ということになるだろう。更に、『うつほ物語』における「色好み」のもう一つの特質は、「かたち清らに、心のなまめきたること限りな」（「忠こそ」p.217）い忠こそ、「かたちもいとこともな」（「嵯峨の院」p.354）い仲頼、或いは「故侍従（仲澄）には、かたちも心もまさ」（「蔵開　下」p.538）る近純などのような美貌と優雅さの持ち主でなければならない。

以上、用例に即して、「色好み」の内実と特質を検討してみると、共通するところもあれば、個人差もかなりあることが分かる。ただ、「色好み」の社会的概念は、やはり『竹取物語』における五人の貴公子のような、政界、社交界の最高の成員であることを条件にしていると考えられる。また、たとえ、兼雅と平中納言のような「色好み」の行動様式でも、やはり単なる「好色漢」を意味するのではなく、希求され、憧憬され続けた神話・王権時代の「妻覓ぎ」を幻想として胸に抱き、「よき人々の娘」、「あるじある女」、「皇女たち」或いは「御息所」などの、手の届きにくい女性を選択して愛する「色好み」であると思われる。

南波浩氏は、『うつほ物語』の「色好み」について、次のように評価[12]している。

> 「ただ人」たちが「かぎりなき」・「いとかしこき」・「名高き」・「世の中の」・「たぐいなき」色ごのみとよばれており、それらはやはり情趣的、教養人的、人間的な理念として「色ごのみ」の語を使っているが、とくにそれらの用例において注目されるのは、「かしこき遊人」（すぐれた管弦家）・「遊びいとかしこく、事もなき」（管弦に堪能で、難のない）とか、「孔あるものは吹き、緒ある物は弾き……云々」のように、「色ごのみ」の資格条件に音楽の教養技能を付加している点である。これは、当時の

[12] 南波浩（1982）「『色好み』の歴史社会的意義」日本文学研究資料叢書『源氏物語IV』有精堂、p.282 上（初出：近藤忠義教授還暦記念論文集『日本文学古典新論』河出書房、1962）

臺灣大學學術資料庫

歴史社会において、管弦の才能が栄達の一つの道とみていた宇津保の主題と関連している。

したがって、『うつほ物語』における「色好み」は、古代王者の「妻覓ぎ」のような王権的幻想の面と、天才的な音楽的素質とが表裏一体をなしている社会文明的理念を開示していることになる。

作者が使用している「色好み」の意味内容は以上のようであるが、求婚者たちの「色好み」は、ほとんど単に登場するときに説明的文章で紹介されている程度で、物語として描写されず、次第に物語の舞台から姿を消してゆく。あて宮入内後、まだ物語世界に残り、物語展開と関わっている「色好み」は主人公仲忠の父兼雅一人だけである。

ところで、「世の中の色好み」と紹介される仲頼は、すぐ、また、

あやしきたはぶれ人にてありける中に、仲頼は天下の一院三宮婿取りたまへど、取られず、白銀、黄金、綾、錦をもものとも思へらず、あやしくたぐひなき好き者にて、天女下りたまふらむ世にや、わが妻の出でこむ。天の下には、わが妻にすべき人なし、となむ思へりける。（「嵯峨の院」p.355）

と、「たはぶれ人」、「好き者」として扱われ、また、天女を妻にと夢想する理想主義的な恋愛家としての一面を見せる。つまり、仲頼は天才的な音楽家であり、理想主義的恋愛家であったため、「色好み」＝「好き者」の世評を得たのである。

そのほかに、兼雅は、子仲忠に弾琴を催促する場面で、「好き者や。なほ仕うまつりて、重き禄やは賜はらぬ」（「俊蔭」p.116）と呼ぶ。また、正頼が主催する納涼会の桂川の夏神楽の場面で、兵部卿の親王は、仲忠、実忠も含めた多くの求婚者を「好き者の才侍る」（「祭の使」p.473）と褒めている。これも音楽に堪能で、才能のある人に

臺灣大學學術期刊資料庫

対して、「好き者」という言葉を使った例であろう。

これに対して、物語中、極度の吝嗇により、莫大な財産を蓄えて、屈指の道化者としても知られる三春高基は繰り返し、正頼の娘に集まる求婚者たちを、次のように厳しく批判する。

①あぢきなきこと。この大将ぬしの、大きなるところによき屋を造り建てて、天の下の好き者どもを集めて、ものをのみ尽くすは、何の清らなることか見ゆる。（「藤原の君」p.167）

②「すべて殿は、かかる好き者ども語らひ集へたまひて、もの尽くしたまふこそ。そしりも取り、ものの費えとあらむ。賜はりたまふ官は、盗人のみ集ひて、人の衣をはぎ取り、飯、酒を探し食む衛府司、取りたまふ御婿は、みな好き者、あるは痴れ、あるは衛府かけてきしろう大臣、公卿と、これはみな貴人、好き者ども、いささかに構へ渡らふ心もなし。（「祭の使」p.480）

③ただ今は、この右大将のぬしの子よ、仲忠とかいふ好き者を心に入れて、夜昼遊び女据ゑて、好き者にいますがめる宮に参りたまひては、何わざはしたまはむと。親の綾、錦にまとはれて、清らを好み、かたちをつくろひて、遊びわざうちして、行く末はかなくてあるばかりぞかし。あな心苦しや。（「祭の使」p.482）

つまり、三春高基の言う「好き者」は、管弦歌舞などの遊びに耽って、実務に全く無能なあて宮求婚者たちを指すのである。特に、③の仲忠は名指しで、強烈に非難されている。しかし、道化者の口から出た「好き者」批判であるが故に、かえって、作者の「好き者」に対する思い入れがうかがえるのではないだろうか。秘琴一族の代表者である仲忠は、音楽にせよ、ほかの才能にせよ、また、特に一代美女あて宮への恋心においても、仲頼に劣らない、「好き者」と批判されている一人である。その「好き者」の意味内容は、政界・社

臺灣大學學術期刊資料庫

交界の最高の成員、遊びの達人、風雅な趣味の所持者、積極的な求婚行動の実践者など、従来の「色好み」の社会的概念に通ずるものであると考えられる。では、なぜ作者は仲忠を「色好み」にしなかったのだろうか。そこには「好色者」の誤解を忌避しつつ、理想的な主人公像を造り上げようとする意図があったのではないかと思える。

「国譲」巻における立太子の政争では、朱雀院の中宮は藤原氏の権勢を伸ばすため、積極的に梨壺の御子を春宮にしようと、兄弟の忠雅と兼雅の両家と密議を行ったが、忠雅と仲忠とは正頼の縁者であり、暗に仲忠はあて宮贔屓なので、中宮の謀り事は失敗に終わる。つまり、立太子の政争の表面は中宮の謀り事を材料にした世相描写であるのに対して、裏面では蜘蛛の巣のようにあらゆる面に政権を網羅する正頼一族の広大な政治力が誇示されていると考えられる。作者は政治的事件を通して、政治家正頼と好色者兼雅の政治的葛藤と、兼雅の敗北を描き、その政治的敗北の原因が兼雅の個人的な「色好み」にあったとして、「色好み」を象徴的な批判の対象として捉えているのである。そのほか、次のように、作者は兼雅一家三人の「色好み」に対する賛否両論を取り上げて、暗に兼雅の猟色的な「色好み」を非難している。

> （兼雅）「（前略）今様の人は、あやしうまめにこそあれ。まづは、かしこき天下の帝の御娘を持たりとも、その妹の皇女たち、そのあたりの人の妻は、女御まで残してましや。罪の浅きにやあらむ」とのたまへば、大将（仲忠）、「いとうたてあること。一人侍りし時、いかでと思ひたまへし人をだに、よき折侍しかど、さもあらずなりにしものを。」おとど（兼雅）「それこそ、いとわがごとくなけれ。今もなどかさせざらむ。まかでてものせられむ時、空酔ひをして、ただ入りに入るべきぞかし。人も騒がば、『いたく酔ひにけりや。ここはいづくぞ。中のおとどにはあらずや』と、ただ酔ひに酔ふばかりぞかし。」北の方（俊蔭

臺灣大學圖書館期刊資料庫

娘)、「いと悪しきこと多くしたまひけるかな。若き人は、親かくのたまふとも、そこは早う立ちたまひね。な聞きたまひそ。」おとど(兼雅)「男こは身を顧み、人の思はむことを知りなば、よき妻は得てむや。文通はして許されむ時といはむには、何わざをかせむ。隙を見て、ふと入りぬればこそ。まして、あしこの乱れて歩かむは、追うふ女しあらじかし。二の宮と、源中納言の妻とは、早うこそ」などのたまふ。大将(仲忠)「いとあやしきこと。(後略)」(「蔵開　中」p.516-517)

無論、作者は既に三春高基を通じて正頼の娘(特にあて宮)に集まる「色好み」の男たちを「好き者」と批判する姿勢を示しているが、更に政権闘争により、「古代の政治的目的の「色好み」の精神＝王権的精神」からはほど遠い、兼雅のような平安朝初期の個人的な「色好み」を否定し、逆に正頼一族には政治的栄光を与えているのである。

前記のように、仲忠は父兼雅の「色好み」論に賛同し得ない。そして、彼は正頼一族の政治力を意識しているか否か分からないが、権門源正頼家に対抗できる藤原家を再建するため、清原俊蔭の血を引く秘琴一族と藤原氏政権の中心となる兼雅一族の代表者として、選ばれざるを得ない。仲忠は直接的な政治手段には拠らず、音楽に堪能で、才能のある「好き者」と学問[13]の調和を全うすることに努める。秘琴一族としては、母に琴の秘技を披露させたり、祖父俊蔭の遺文を顕揚させたりし、また、兼雅一族という共同体を維持するために、父が顧みぬ、一条に住む妻妾や行方不明になった妻子たちを引きとることに配慮と誠意を尽くすのである。万事は仲忠の特質と行き届いた働きによって理想的に運営される。換言すれば、『うつほ

[13] 武藤 那賀子「『うつほ物語』の琴と学問の公開の場の方法」(物語研究会『物語研究』第十四号、2014)
注(6):〈学問〉とした場合、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物と、そこから得たであろう知識すべてを指すものとする。このため、漢籍以外の俊蔭や俊蔭の父の日記・俊蔭の母の歌集も〈学問〉に含める。(p.119 下)

臺灣大學圖書館典藏資料庫

物語』において、仲忠は、「孝」と「好き者」の精神に基づいて、全家族の運命を担う働き手として、母系の秘琴の霊力を発揮し、父系の「色好み」の王権幻想的な王国を理想的に再構築し、栄光をきわめたと言えるのである。

四、「俊蔭伝来の書籍の学問者」、「秘琴系譜の伝承者」、「友情の知音者」

仲忠は「蔵開　中」巻において、祖父清原俊蔭伝来のの蔵から出てきた書物を朱雀帝の御前で俊蔭の父の日記・俊蔭の母の歌集も含めて、清原家の〈学問〉を進講したことによって、琴の才能のほか、学門家でもあると宮中で高く評価される。また、武藤那賀子氏の次の指摘によると、

> 仲忠は、〈蔵開き〉によって〈琴〉だけではなく〈学問〉を獲得した。たとえば、仲忠が〈琴〉を獲得したのみであったならば源涼と相違ないし、〈学問〉を獲得しただけであったならば、藤原季英（藤英）と変わらなくなってしまう。そして、涼も藤英も物語の後半では、あまり活躍の場がない。源涼・藤英よりも抜きんでるためにも、仲忠は〈琴〉だけではなく〈学問〉が必要だったのではないか。[14]

〈学問〉と〈琴〉の二つが同様の論理構造を持ち、その重要性は看過できないものである。この見解からも分かるように、作者が特質のある源涼と藤英[15]との二人の人物造型と物語を創り上げる主な

---

[14] 武藤 那賀子（2014）「『うつほ物語』の琴と学問の公開の場の方法」物語研究会『物語研究』第十四号
女性の気持ちがよく分からない人物として描かれているのである。そもそも季英のレゾンデートルである「学問」にしても国家に資するためのものではなく正頼家の婿になるためのものでしかない。（p.107 下-108 上）

[15] 佐藤厚子（1989）「うつほ物語の「学問」―藤原季英の人物像を中心に―」『椙山女学園大学短期大学部二十周年記念論集』
藤英が正頼家の宴に参加し学才を披露したのは、官職を得るためでなく正頼家の婿となるための行動だったのである。(中略) 藤英の学問が、官吏なって

臺灣大學圖書館期刊資料庫

意義は、仲忠の理想的な男性像の一面を際立たせるためのものなのである。それだけではなく、才能や特色などを持っている多くの求婚者たちの面影と照らし合わせてみれば、仲忠は物語においてその強みと弱みとを統合する形での理想的な男性像として、浮き彫りにされていると思われる。その一例をあげると、仲忠は多くの男性主要登場人物と「類は友を呼ぶ」という友情共同体[16]を織り成す知音者である。

仲忠は十八歳で侍従となった年の五節の試楽の日に、十二面の秘琴[17]の「せた風」の琴を弾いた。またその翌年の八月二十二日、相撲の還饗で同じ俊蔭が伝来した「りうかく風」に手を触れ、心を込めて弾いた。仲忠は貴族社会の楽や宴の場を通して、若手の仲頼、行政や仲澄など音楽の達人たちに音楽と琴の才能を認められ、貴公子たちの仲間に加えてもらっただけではなく、政治の中枢にいる源正頼の息子仲澄と、「源侍従の君をはらからと契りて語らふ」(「嵯峨の院」p.320）と深く兄弟の約束をして睦まじく語り合っている。それ以来、仲忠は源正頼家主催、宮中主催あるいは秘琴一族主催の宴や年中行事などの多くの祝祭の場面において、音楽的才能を発揮し、注目の的になる。宴で注目を浴びる人々はほとんどあて宮求婚者であり、良岑行政、源仲頼、源仲澄、藤原仲忠、源涼と、出家した橘忠こそなどの上達部である。仲忠は公私にわたる宴や年中行事で音楽と琴のすばらしさを媒介に活躍ぶりを見せるほか、多くの親王や上達部と友情を深めていく。物語における宴会や歌会から分かるように、すでに友情関係を結んだ仲頼、行政と仲忠三人は、あて宮へのタブーの恋に思い悩んでいる仲澄を残して、同じ恋の悩みを抱え

国家に資するためのものではなく、正頼家の婿となるためのものであったことを、改めて確かめることができる。(p.28)

16 拙稿（2019）「『うつほ物語』の音楽による友情共同体」『台大日本語文研究 NTU Studies in Japanese Language and Literature』第 38 期、pp.1-25

17 十二面の秘琴「なん（南）風」、「はし（波斯）風」、「りうかく（竜角）風」、「ほそを（細緒）風」、「やどもり（宿守）風」、「やまもり（山守）風」、「せた（梅檀あるいは瀬田）風」、「はなぞの（花園）風」、「かたち（容貌）風」、「みやこ（都）風」、「あはれ（哀）風」、「おりめ（織女）風」

たまま、鬱憤晴らしをするため都を離れ、異空間の吹上の浜でまた琴の好敵手の源涼に恵まれた。

源涼はようやく「吹上　上」巻で、祖父神南備種松のもとで育ち、容貌が美しいばかりでなく、勉学、音楽、特に清原俊蔭と並ぶ名手と称された丹比弥行に琴を習い、素晴らしい才を持つ人物として紹介される。源涼が「やどもり風」をもらって奏でると、この四人にその演奏の素晴らしさを褒められ、その後も、上巳の祓、藤花の宴、鷹狩などの宴の際に、都の人々を心を尽くしてもてなすことになる。四人の客人たちは帰京するにあたり、種松が豪勢な贈り物[18]を用意して人々に贈る。テキストの頭注の注釈にあるように、

> 涼は、仲忠たちに、特に心を尽くした餞別を贈りたいと思う。永遠の別れとなるやもしれぬ気持と、友情の継続をしたいという思いがさせたのだろう。（中略）餞別の品を記すことで、涼の仲忠たちに対する友情の深さを象徴的に描く。（「吹上　上」p.418-419）

このように、源涼の加入によって求婚者のライバルがもう一人増えたにもかかわらず、音楽の才能を持つ人々の間に強固な友情共同体が結成されることになるのである。

そのほかに、仲忠は、「明日御車賜へ」（「蔵開　下」p.540）と父兼雅の代わりに嵯峨院の女三宮を迎えに行くため、親友の涼から牛車を借りたり、立太子争いの嵐を避けるため、涼などの仲間を誘って、一緒に出家した仲頼を訪ねて水尾へ赴いたり（「国譲　下」p.298-314）する。涼は「財の王」である祖父種松を後ろ盾に、いつも祝い事のたびに仲忠、入内後のあて宮や正頼家の関係者などに豪華な贈り物や土産をする。涼は仲忠と同じように「琴の伝承者」として物語で語られるが、

18 「吹上　上」p.412-419

臺灣大學學術期刊資料庫

> 物語の最後に、嵯峨院の話を通じて「弥行が琴どもに似ず」へと変化する意味は、涼の系譜に対する、「ものの序は」と表現されている俊蔭一族の天上の系譜の優越性を強調することである。そして仲忠は、「人に見せ給ふな」という秘琴披露の禁忌によって一族の優位性を示した俊蔭とは異なる「もろともに御覧ぜむ」披露によって王権へ接近し、その王権との結びつきを通して一族の優越性を高める。[19]

と、涼は琴の系譜が断絶し、俊蔭一族の秘琴物語へと吸収され、一族の琴の素晴らしさを認定してくれる理解者と媒介者にしか造型されなかったのである。物語の終焉に、「楼の上　下」巻で、三条京極邸の十五夜の宴で、俊蔭の娘は「はし風」を演奏して奇瑞を起こした後、いぬ宮に「りうかく風」を弾かせ、その腕を試そうとするが、その音色の変化にすぐ朱雀帝に「変はるなるは」(「楼の上　下」p.606）と気付かれたほか、

> 大将（仲忠）のみぞ、人知れずあやしと思ひたまふ。源中納言（涼）の、「あやしく、りうかくの声は、暁なれど、少しこそ変はれ。このかうざまの音は、大将は同じやうに、え伝へたまはざりけることかな」(「楼の上　下」p.606）

と、仲忠自身は無論、涼にも音の変化を察知される。涼も仲忠と同じように「変化のもの」として、「顔かたちより始め奉りて、様・心・才にいたるまで、相手なし」（吹上・上、二四四）と評価されている。このように物語においては、仲忠と涼を登場の段階で、卓抜した性質を持つ主人公として配置し造型していくが、琴の伝承者として物語の前後を統一した理想像はやはり仲忠でなければならな

[19] 柳瀞先(2001)「『宇津保物語』の仲忠と涼の人物造型――琴の才の視点から」日本文学協会『日本文学』50 巻二号、p.9 下

臺灣大學圖書館期刊資料庫

い。涼は確かに「誰にでも良い顔をする、要領の良い人」という褒め言葉での「八方美人」の人物として造型されるが、仲忠はその優越性を高めて、俊蔭一族が残した書物を進講した学問家、友情共同体を織り成す知音者や秘琴一族の伝承者などの役割も大いに果たすことにより、八面玲瓏な理想的な男性像として創り上げられたと思われる。

五、おわりに

『うつほ物語』は、「源正頼一族」と「藤原兼雅一族」という家族単位の交差図に拡大した長編物語である。この大きな枠組みの中に多くの登場人物を配置し、更に四代にわたる秘琴一族の物語を展開するという相乗的な演出効果によって、物語の縦の繋がりと横の繋がりの中で物語全体を構成する諸要素同士の、対立・矛盾・依存などの関係、あるいは複雑な物語の部分部分や要素要素の配置という対比複線構造が浮かび上がってくるのである。特に主要登場人物に関して、様々な人物造型と物語が創り上げられる流れの中で、藤原仲忠は父兼雅の「色好み」と違った、「光」る容貌を持ち、音楽に堪能である。才能のある「好き者」としての一面と学問の調和を全うする仲忠の特質、またその行き届いた働きによって、「あて宮」を中心とした権門源正頼家に対抗し得る存在として、藤原兼雅一族を理想的に運営してゆくのである。『うつほ物語』では、俊蔭女の寛容と仲忠の誠意があればこそ、兼雅のかつての「色好み」の悲劇を払拭し、三条の邸宅での過不足なき平和な大家族とでも言うべき楽園を作り上げることができたのである。『うつほ物語』における「色好み」の理念は兼雅の「好色」を匂わせる慣習的制度そのものではなく、「好き者」の仲忠の法的制度の一夫一妻の精神と俊蔭女の寛容心、思慮深さに支えられているのである。このように、最も理想的な「色好み」的ユートピアを、後の人々に提示していると言えるのではないか。光源氏が設営した、「色好み」の理想郷と言われる六条院は、『うつほ物語』のユートピア的三条の後胤なのではなかろうか。

臺灣大學學術期刊資料庫

また、中国の孝子説話の孝子に擬する仲忠は、求婚過程において、琴の秘技によって宮廷社会に認められ、あて宮の好意を得たが、王権の若い代表者の春宮という競争相手の強要の反動として、熾烈な恋情を非常の行動に任せようと思う反面、倫理的な「孝」の精神が作動して、あて宮を奪わなかったことにより、かえって身を滅ぼす危機を逃れ、あて宮の最愛の相手となった。

犬宮の秘琴伝授が、首巻「俊蔭」巻と呼応することから、それが作者の意図的な物語の全構想であったと言えよう。そして、秘琴物語という主題を構造化するため、作者は、一族の命脈を繋げる仲忠を創り上げ、秘琴を媒介的小道具とし、更に「孝」の精神を内的構造として、流離の艱難辛苦をさせ、求婚の危機を乗り越えさせると共に学才を発揮させ、交友関係をも拡大していく。このように物語は連続的、漸進的に昇華されていき、ついに円満な結末へと至るのである。要するに、作者は、多くの主要登場人物の造型と物語を創り上げる流れの中で、藤原仲忠を描きあげ、以上述べてきた、その生き生きとした八面玲瓏な人物特質を理想的な男性像として日本史上初の長編物語である『うつほ物語』の主な意義と統一性を求めたと考えられよう。一方、仲忠の八面玲瓏な人物造型が物語を支えている蔭に、俊蔭娘の重要な役割も忘れてはならない。『うつほ物語』における理想的な男性像の延長線に、理想的な女性像としての俊蔭娘を「国母」格の人間造型として探求する計画を筆者は持っているが、それについては稿を改めて論じることにしたい。

【付記】中華民国科技部の専題研究計画「《宇津保物語》中的「人物造型」研究（『うつほ物語』における「人物造型」の研究）」（MOST 108-2410-H-030-007-MY2）補助金を受け、書き下ろしたものである。

臺灣大學學術期刊資料庫

【参考文献】

A. テキスト

中野幸一 校注・訳(1999～2002)新編 日本古典文学全集『うつほ物語①～③（全 3 巻)』小学館

B. データベース

中野幸一 校注・訳(1999～2002)新編 日本古典文学全集『うつほ物語①～③（全 3 巻)』小学館

（知識探索サイト ジャパンナレッジ プラス JapanKnowledge+） http://www.jkn21.com/koten/displaymain

C. 専門書籍と機関誌論文（出版年代順）

佐藤厚子（1989)「うつほ物語の「学問」―藤原季英の人物像を中心に―」『椙山女学園大学短期大学部二十周年記念論集』

室城秀之（1996)『うつほ物語の表現と論理』若草書房

竹原崇雄（1990)『宇津保物語の成立と構造』風間書房

上坂信男、神作光一 訳注(1998)『宇津保物語・俊蔭 全訳注』講談社、講談社学術文庫

大井田晴彦（2002)『うつほ物語の世界』風間書房

桜井満、宮腰賢 編（1993 年重版発行)『全訳古語辞典』旺文社

柳瀞先(2001)「『宇津保物語』の仲忠と涼の人物造型――琴の才の視点から」日本文学協会『日本文学』50 巻二号

南波浩（1982)「『色好み』の歴史社会的意義」日本文学研究資料叢書『源氏物語Ⅳ』有精堂

猪川優子（1997)「『うつほ物語』の〈秘琴〉と〈あて宮〉―「繋がり」の形成をめぐって―」『古代中世国文学』9 号、広島平安文学研究会

学習院大学平安文学研究会(2013)『うつほ物語大事典』勉誠出版

武藤 那賀子（2014)「『うつほ物語』の琴と学問の公開の場の方法」物語研究会『物語研究』第十四号

臺灣大學學術期刊資料庫

拙稿（2019）「『うつほ物語』の音楽による友情共同体」『台大日本語文研究 NTU Studies in Japanese Language and Literature』第 38 期

臺灣大學學術期刊資料庫